

スペイン語辞書の歴史¹⁾

—日本語との二言語辞書をめぐって—

堀 田 英 夫

Historia de los diccionarios de español

—en torno a los bilingües con el japonés—

HOTTA Hideo

1. 辞書

江戸時代中期の日本で杉田玄白、前野良沢ら4人が満足な辞書が無いままオランダ語の解剖書『ターヘル・アナトミア』を漢文訳した時の苦勞が、菊池寛の短編「蘭学事始」に描かれている。解剖の書なので、体の表面の図もあり、眉、口、唇、耳、腹、股、踵などの単語はその図から覚えていき、その単語を手がかりに、その語の前後の文章を解説していったのである。「眉トハ目ノ上ニ生ジタル毛ナリ」という一句を解説するのに2日の間考え抜いたとか、「鼻とはフルヘッヘンドせしものなり」という一句の中のフルヘッヘンドという一語を他の書物の「木の枝を断ちたるあと、フルヘッヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土^{じんど}聚^{あつま}りて、フルヘッヘンドをなす」という注釈と比較して4人が口も聞かずに考え、ようやくのことで「うずたかくなる」という意味だと気づいたといったエピソードが書かれている。

外国語を理解したり翻訳したりするためには、たとえ良い辞書があったとしても、多かれ少なかれ、杉田玄白らのように思考力を使う必要がある。語には一つの意味が結びついているのではなく、それが使われている文脈の中で一定の意味を醸し出しているから、見出し語に付けられている訳語や定義の中のどの意味がその文脈にあうのかを判断しなければならない。あるいはその文脈にあう訳語や意味が記載されていない場合があるからである。また生きた言語である限り辞書の見出し語にない新語が日々使われているということもある。

現在のスペイン語学習者は、nariz (鼻) の定義中の “parte que sobresale” (突き出ている部分) の中の sobresale が動詞であり、原形が sobresalir とわかりさえすれば、西和辞典によって「突き出ている」という訳語を見ることができる。電子辞書なら、sobresa- ぐらいまでを入力すれば、sobresalir という動詞があることがわかり、その訳語を知ることができる。品詞別や文法情報も掲載されている。このような、スペイン語学習に不可欠なスペイン語の辞書は、どのような歴史を経て現在の形になったのであろうか。本稿では、二言語辞書を中心に、主な辞典を実用的な観点から見ることでスペイン語辞書の歴史上の歩みを見る。

2. スペイン語の誕生とイベリア半島最初の辞書

スペイン語の祖先は、ラテン語とされる。ローマの言語であったラテン語がイベリア半島にもたらされ、時代とともに変化してきて現代のスペイン語にまでなった。名称もラテン語から派生した言語という意味で romance (ロマンス語) と呼ばれていた時代から、カスティーリャ王国の言語として castellano (カスティーリャ語) と呼ばれ、統一国家ができてから今の名前である español (スペイン語) と呼ばれることになった。イベリア半島においてはガリシア語とカタロニア語の他に、レオン地方やアラゴン地方のことば(「レオン方言」および「アラゴン方言」)もまたカスティーリャ語と並んで、ラテン語から派生したロマンス語とされている。ローマ帝国の影響を受けた他の地域と同じくイベリア半島での書きことばはかつてラテン語であり、残っている碑文や古文書は、年代を下るにつれてガリシア、レオン、カスティーリャ、アラゴン、カタロニアなど、それぞれの地方の普段のことばの特徴がより多く含まれるものになってきている。

現代スペイン語の祖先であるカスティーリャ語の最も古い形が書き残された古文書の所在地が、比喩的な表現 *cuna del castellano* (カスティーリャ語のゆりかご・発祥の地) で呼ばれる。スペイン国ラ・リオハ州にあるサン・ミリャン修道院とカスティーリャ・イ・レオン州ブルゴス県にあるバルプエスタ (Valpuesta) の2箇所がその名乗りを上げている。

サン・ミリャン修道院に残されていたラテン語の宗教書の一つ『(スペイン歴史アカデミア蔵) 古文書60番』の行間やまわりの余白部分に解釈

や注釈が、ラテン語とは異なる当時の修道士が理解しやすいことばで書き加えられていて、『サン・ミリヤン注解』(Glosas Emilianenses)と呼ばれている。文書そのものは、ラテン語で書かれた宗教書の写本である。当時の修道士は修行の一つとしてラテン語を学び、ラテン語で書かれた写本を読んで勉強したり、書き写したり、ラテン語で記録をとったりしていた。当時の修道士達が日常使う言語は既にラテン語から変化してしまった言語だったから、ラテン語を学ぶということは、現代日本の我々が古文や漢文を学ぶようなもので、理解したり書いたりするためには勉強が必要であった。難解な語句の意味や注をページの隅や行間に別の易しいラテン語や当時自分たちが使っていたことばで書き留めた。我々が外国語を学ぶ時に、外国語文の行間に日本語で訳や文法的な注釈を書き込むのと同じようなことを中世のスペインあるいはヨーロッパの修道士たちがしていたということである。

『サン・ミリヤン注解』に使われていたロマンス語は、スペイン語・カスティーリャ語の祖先ではなく、カスティーリャ語誕生の地より東の「アラゴン方言」である²⁾。「アラゴン方言」という名称は、ラテン語から発展したロマンス語のイベリア半島における一方言に与えられた名称であり、ガリシア語、カスティーリャ語、カタロニア語と並ぶ言語形態と意識されている。そのためスペイン語・カスティーリャ語の最古の記録は、『サン・ミリヤン注解』ではなく、ブルゴス県バルプエスタのサンタマリア教会に保存されていた *cartulario* (教会の記録簿) (記載年代の最古は804年) であるという主張がある。Ramos (2000) によると、「注解」が、意図的にロマンス語 (あるいはバスク語) で書かれた部分があるのに対して、「記録簿」は、ラテン語を意図して書かれた中に当時のロマンス語の特徴があちこちにこぼれ落ちている文章で、次のような要素が原始カスティーリャ語の特徴であるとしている: ヨッド (yod) の前の二重母音化阻止、二重母音 ie と ue の変異形があまり存在しないこと、硬口蓋音の前の ie の縮小 (novillo : noviello)、下降二重母音の消滅 (carrera : carreira)、F- の消滅 (Heliz: Felix)、前部硬口蓋音 LY の結果 (綴字 gi, g, i; paregios ‘ pares, parejos’ < *PARICULUM)、SCY の破擦音化 (綴字 z, ç; açadon)、KT の硬口蓋音化 (綴字 g, gi, x; Fontegegia -Fontecha- < -TECT) など。

同じサン・ミリヤン修道院蔵で、奥付に西暦964年(ユリウス暦1002年)6月13日に書き終えた (*Est uero expletum sub era millssima secunda die*

enim ... tissimo ... idus iunias currente XII) (García & García, 1997a: 4) という記述がある『(スペイン歴史アカデミア蔵) 古文書46番』の主要部分がイベリア半島最初の百科辞典 (primer diccionario enciclopédico) とされている³⁾。AからZまでアルファベット順配列⁴⁾で2万以上のラテン語の見出し語をラテン語で説明する辞書である。このラテン語も中世初期のものでイベリアの初期ロマンス語の特徴を示している⁵⁾。辞書として当時のヨーロッパの多くの語彙集の中で収録語彙の広範囲であることや豊富さで抜きん出っていて、ブルゴス県シロス修道院所蔵であった別の語彙集 (パリ国立図書館蔵1296番、1297番) 作成のモデルであることが間違いないとされている。

3. スペイン語辞書の誕生

修道院に残されていた『注解』は、理解が難しい語句に別の理解しやすい語句をあてたものなので、辞書の見出し語とその訳語ないし語義説明の部分と共通している。辞書というものは、定義⁶⁾によれば、集められた語がある順番に配列してあり、説明してある本ということなので、『注解』は、辞書とは言えない。しかしここに辞書のはじまりを見ることができ⁷⁾。このように文献を読んでいく過程で、わからない語を教師や先輩にたずねたり、別の文献⁸⁾を参照したりして解釈することによって理解できたものに注釈をつけていった。そしてそれらの注釈がある程度多くの数になったら、理解するのに難しい語句を覚えるため、あるいは後輩に教えるために別の紙に特定の分類や配列で書き写していった。また、いくつかの書物に書き込まれた注解をできる限り多く集めることで語彙集や辞書というものが作り出されたということが想像できる。14世紀末から15世紀に書かれた語彙集の写本が翻刻されている (Castro, 1991)。それらが現存している最古期の羅西語彙集と言える。それぞれ所蔵されていた所の名前で区別している。

『トレード (大聖堂蔵) 語彙集』 (Glosario de Toledo) 14世紀末から15世紀初頭⁹⁾。

『王宮 (蔵) 語彙集』 (Glosario de Palacio) 14世紀末から15世紀初頭。

『エル・エスコリアル (修道院蔵) 語彙集』 (Glosario de El Escorial) 15世紀。

これら語彙集の見出し語の配列は、上で見た『古文書46』とは異なり、アルファベット順ではない。『トレード語彙集』は、男性名詞、女性名詞、中性名詞、動詞活用別、副詞などに分類してあり、男性名詞と女性名詞の分類の中では、aで始まる語、bで始まる語、cで始まる語という具合に単語の最初の文字で集めてある。見出し語数は2,455である¹⁰⁾。『王宮語彙集』の553語の見出し語の配列は、秩序がない。『エル・エスコリアル語彙集』は語彙集と付録からなり、語彙集部分で3,117語の見出し語の大部分は、副詞と名詞の分類の中で語頭のアルファベットごとに分類してある。これらの語彙集は、検索よりも学習が目的で、アルファベット順である必要性は低かったものと思われる。

4. 印刷された史上最初のスペイン語の辞書

新しい辞書を作る際、先行の辞書の形式や内容を取り入れ、それに何か新たなものをつけ加えることで作成するというのも辞書編纂の歴史の中で連綿と続けられてきた。印刷された史上最初のスペイン語辞書とされるアロンソ・デ・パレンシア『ラテン語・ロマンス語による普遍辞典』(Alonso de Palencia: *Universal Vocabulario en latín y en romance*, 1490) も、北イタリア、ロンバルディアのパピアスという人の『基礎教科入門』(Papias: *Elementarium Doctrinae rudimentum*) というラテン語の辞書から多くを負っている(Azorín, 2000: 30)。パレンシアの辞書は、一ページに二段組みとなっていて、左側の段にラテン語の見出し語とその文法説明や百科辞典的な説明などをあげ、右側に同じ見出し語を掲げ、左側のラテン語説明のカスティーリャ語訳を掲げている。すなわち一ページの左側がラテン語をラテン語で説明する辞書、右側が羅西辞書となっている。見出し語数は約14,000である(Azorín, 2000: 31)。ラテン語見出しにカスティーリャ語での説明が付されていることにより、ロマンス語圏の中で、ラテン語への訳語として体系的に俗語を用いた最初の著作である(Azorín, 2000: 28)。ラテン語初学者がラテン語を調べるのに、カスティーリャ語訳で理解できるようになっている。配列が厳密なアルファベット順になっていないとか、文法説明がすべての語につけられているわけではなく、つけられていても説明の中のどこにあるのか位置が一定していないとか、当時の人々にもあまり使いやすい辞書ではなかったようで、現在まで残っている部数は極め

て少ないとのことである。それよりもわずか2年後に印刷されたネブリハの辞書の方が、多くの版を重ね、後の辞書編纂により多くの影響を与えている。

5. 最初のスペイン語見出しの辞書

ネブリハという人は、近代語で史上最初の文法書を書いたということで有名であるが、スペイン語見出しの辞書を最初に出版した人でもある。その前にラテン語見出しにスペイン語で訳を付けた羅西辞典を、文法書を出したのと同じ1492年に出版した。

アントニオ・デ・ネブリハ『羅西辞典』(Elio Antonio de Nebrija: *Lexicon hoc est dictionarium ex sermone latino in hispaniensem* o *Diccionario latino-español*, Salamanca, 1492)

約28,000 (Alvar 2002: 122) の見出しで、動詞は直説法現在1人称単数見出し形に2人称単数形語尾が付され (*Amo.as. por amar con afición y pasión*)、名詞は主格単数の見出し語に属格単数語尾 (*Homo hominis. por ombre o muger*)、形容詞は主格単数男性形の見出し語に単数の女性形と中世形語尾が付付けられ (*Bonus.a.um. por cosa buena*)、それぞれの語の変化形を知ることができる。

次に、スペイン語単語をアルファベット順に並べ、相当するラテン語訳を置いた形式の辞典を出した。これが史上初のスペイン語見出しの辞典である。

アントニオ・デ・ネブリハ『西羅辞典』(Elio Antonio de Nebrija: *Dictionarium ex hispaniensi in latinum sermonem* o *Vocabulario español—latino*, Salamanca ¡1495?)

カリブ海アラウアコ語起源の *canoa* (カヌー) という語が収録されている (“*Canoa nave de un madero. monoxylum.i.*”) ので出版年は、コロンブスがスペインに戻った後である。また序文に、ネブリハがオルメドの戦い(1445年)の前年生まれで51歳に近づいている (“*se me allega ia el año de cincuenta y uno de mi edad: por que naci vn año antes que en tiêpo del rei don juá el segundo fue la prospera batalla de olmedo*”) と書いていることなどから、1494年以前ではなく、1495年9月30日より後ではないと推定されている (Alvar 2002: 121)。見出し語は約22,500 (Alvar 2002: 122) で、a, b, c (/k/

の後ろに /ç/, またその後ろに ch), d, e, f, g (/g/ の後に ge, gi), h, j (現代語で /x/ に相当), i¹¹⁾, l, ll, m, n, o, p, q, r, s, t, u, v, x, z の配列である。スペイン語一つの語形で複数のラテン語単語に相当するものは、見出し語の後ろに説明を加えた後にラテン語を付けている (Carne de buei o vaca. *bouina.ē* | Carne de cordero. *agnina.ē* | Carne de oveja. *ouilla.ē*)。ラテン語の一語に相当するスペイン語がない場合は、説明を見出し語にしている (Muestra de vanagloria. *lactantia*) (Azorín, 2000: 48)。これらは、適切な意味を持ったラテン語を手早く探す目的にかなっているけれどスペイン語学習用としての見出し語の整理とはなっていない。ラテン語訳のための上記のような説明の必要のないスペイン語見出しは、動詞が不定詞形、名詞が単数形 (*Estrella.stella.ē. astrum.i.aster.ris*)、形容詞が男性単数形 (*Alto.altus.celsus.excelsus. sublimis. sūmus*) を見出し語形としてあげている。

ネブリハ、本名 Antonio Martínez de Cala Xalana (1441/4–1522) は、1492年に『カスティーリャ語文法』という史上最初の近代語の文法書を出した。それまでの時代、すなわちヨーロッパの中世では、学問をするということは、すなわち、ラテン語を学習することで、学術的な本や公的な記録もすべてラテン語で書かれていた。ラテン語は書き言葉であり高貴な言語、日常使う話し言葉は、ラテン語に対して俗語と呼ばれていた。「文法」とは、ラテン語を学ぶ教科であり、「文法」というだけでラテン語の文法を意味した。日常使う話し言葉の文法を書くなどということはだれも思いつかなかった時に一人ネブリハがカスティーリャ語の文法書を書いたのである。

Quilis (1980) によるとネブリハは、セビリャ県のレブリハ (Lebrija、当時の名は Nebrissa Veneria) で生まれた。生まれた年は1444年か1441年。生地で初等教育の後、5年間サラマンカで教育を受け、19歳の時、イタリアへ留学し、ポローニャ大学で10年 (か7年: 1463–1470) 学んだ。スペインへ戻り、セビリャの大司教アロンソ・デ・フォンセカ (Alonso de Fonseca) の甥のラテン語教師を3年間務めた。1475年にサラマンカ大学で雄弁術と詩学の講師となり、1476年には「文法」の教授になった。そのころのスペインの大学でのラテン語教育が十分なものではないと遠慮会釈なく発言し続けたため他の教授達からは大いに反感をかったとのことだ。

イタリアのポローニャ大学で学んだラテン語とラテン語教育法をスペインに普及するため、1481年に『ラテン語入門』(*Introducitones latinas*) を

出版するやたちまちのうちにベスト・セラーになった。史上最初の近代語の文法書『カステイーリャ語文法』(1492)は、三つの目的で書いたと序文に書かれている。その中の一つは、ラテン語を学ぶ学生のためとあり、まず母語を文法的に見て、その文法の知識によってラテン語文法を学びやすくすることが目的としている。

羅西辞典と西羅辞典を作った目的もスペインの学生達がラテン語を学習するためだった。ほとんどの見出し語が一行からなり、文法的な扱いや訳語の提示法などの構造が均一であること、説明が簡潔であることなど、当時の学生には使いやすい語彙集として当初の目的は十分果たしたと思われるが、それ以上の役割をヨーロッパ中あるいはそれより広い所で直接的にまたは間接的に果たすことになる。1600年までに羅西辞典は、36版、西羅辞典は40版の出版がされている(Bajo, 2000: 71)。また、ネブリハの辞典は、他の言語の語彙集や辞典のひな型としての役割を果たしている¹²⁾。羅西辞典が、ラテン語との辞書のひな型として、カタロニア語(1507)、フランス語(1511)、シチリア語(1519-20)、ポルトガル語(1569)のものが各地で作られた。西羅辞典は、スペイン語から引く辞書として、アラビア語(1505)、ナワトル語(1555)他、中南米先住民言語、イタリア語(1570)、英語(1591)の辞書が作られた。その後のスペイン語やラテン語の辞書を発展させる基礎としての役割を果たしている。多言語辞典として有名なカレピーノの辞典は、最初は、1502年にラテン語見出しにイタリア語の相当語を付けた辞典として出され、後年いくつかの言語の訳語が付け加えられていった。1545年にはネブリハの辞典からスペイン語部分が加えられた版が印刷されたとのことだ。

6. スペイン語と他言語との辞書

(1) アラビア語

ペドロ・デ・アルカラ『カステイーリャ語の文字によるアラビア語辞典』(Pedro de Alcalá, *Vocabulista arábigo en letra castellana*, Granada)が、1501年に完成し、1505年に印刷された。序文には、この辞書によってイスラムからの新改宗者がスペイン語を、古くからのキリスト教徒がアラビア語を知ることができるとある(fol.2v および Azorín, 2000: 53)。Azorín (2000: 53)は、イスラム教徒への宣教に従事する聖職者がアラビア語を学ぶため

という意図があったとしている。見出し語はネブリハを基にし、いくつかを追加したと序文にあるが、アルファベット順に配列するのではなく、aで始まる動詞、aで始まる名詞、aで始まる副詞、bで始まる動詞、bで始まる名詞、bで始まる副詞……というように語頭が同じ語の中で品詞により分けるという配列である。これはネブリハの辞典と異なっている。Cの末尾にçとch、iとjは区別なく、lの末尾にllが配列してある。ネブリハと同じく2段組で、それぞれの1行にスペイン語見出しとローマ字表記のアラビア語訳が付けられている。6v(裏)から268r(表)までの524ページが辞書の部分である。ネブリハの西羅辞典でaguaの4文字で始まる見出し語は、agua. *aqua.ę.lympha.ę* | *agua pequeña. aquula.ę* | *agua bendita. aqua lustralis* | *aguas biuas en la mar. ęstus maris* | *agua congelada. crystalus.i* など25語あるのに対し、アルカラのスペイン語アラビア語辞典はagua¹³⁾ | *agua ardiēte* | *aguas biuas* | *agua conjelada* | *aguadro* など18語である。両辞典の見出し語は一致していない。

(2) ナワトル語

アロンソ・デ・モリーナは、統治や宣教のためのナワトル語を必要としている者のために、1551年にスペイン語ナワトル語辞典を出版し、これに4,000語以上増補し(Prólogo)、また見出し語約24,000語(Siméon, 1977: LXXXVII および León-Portilla, 1970: LII)のナワトル語スペイン語部分を追加し、1571年に第2版を出版した(Molina, 1571)。第2版の配列は、cの末尾にçとch、lの末尾にll、jの次にy(i)があるなどにおいて、ネブリハの西羅辞典に類似している。語頭aguaの4文字で始まる見出し語は *Agua. atl* | *Agua de axi. chilatl* | *Agua de manos. nematequilatl* | *Agua dulce. yecatatl. chipauacatl* | *Agua de pozo. aolhuazatl. atacomolatl* など44語もあり、ネブリハの25語よりかなり多い。ナワトル語には、他動詞、自動詞、再帰動詞を示すために目的語tla(何か)や人称接辞を付けたり、身体名称には所有辞を付けた形を示したりして、文法の情報を示している(León-Portilla, 1970: LVII-LIX)。スペイン語には、algo(何か)などを付けて他動詞であることを示している。しかしこれはおそらくナワトル語の訳として付けられているのであって、スペイン語の文法情報を示すことを意図したものとは判断できない。

(3) イタリア語

クリストバル・デ・ラス・カサス『トスカナ語（イタリア語）とカステイーリャ語二言語辞典』（Cristóbal de las Casas, *Vocabulario de las dos lenguas Toscana y castellana*, Sevilla, 1570）

Lope Blanch（1988）によるとラス・カサス以前にも、スペイン語も含む多言語辞典やネブリハの辞典のシチリア語訳、翻訳書に添えられた語彙集、フランス語スペイン語語彙集、未出版の原稿があるが、語数やテーマ別の配列などから本格的な辞書とは言えず、ラス・カサスがスペイン語とロマンス系言語との最初の二言語辞書と言える辞典である（X-XV）。ラス・カサスは、ネブリハの辞典を基に、多数の語を補い、基本的な語だけを残し派生語等を削除し、ラテン語では意味により別の語でネブリハが見出し語に上げているがスペイン語・イタリア語では区別のない語を一つにまとめることで語数を絞ったりしている（XVII-XX）。トスカナ語カステイーリャ語の第1部が約15,000語、カステイーリャ語トスカナ語の第2部が約10,000語以上の見出し語を掲載している（XX, n.27）。語頭 *agua* で始まる語は10語あり、ネブリハの辞書より絞り込まれている。配列は、*c/k/* の後ろに *ç, ce, ci* の */ç/*、その後ろに *ch*、現代語で */x/* の音価に相当する *i* の後ろに *y* と *i/i/* を区別なく配列、*l* の後ろに *ll* を置き、*v/u/* の後ろに *v/b/* となっている。G の並びは */g/* と *ge, gi* を区別なく文字による配列である。両言語とも文法情報の記載はない。

(4) 英語

リチャード・パーシバル『スペイン叢書 文法、スペイン語英語ラテン語辞書付』（Richard Percyvall, *BIBLIOTECA HISPANICA Containing a Grammar, with a Dictionarie in Spanish, English, and Latine*, London, 1591）

年代がこれより古い語彙集が2, 3保存されているものの（Azorín, 2000: 65-66）、本格的なスペイン語英語辞書として初めての辞典がパーシバルによるもので、1ページ2段で、1段におよそ35語の見出し語、184ページなので、おおまかな推計で13,000語前後の見出し語がある。スペイン語見出しに英語、ラテン語が付してある。ネブリハでは語義が異なるためそれぞれ見出し語を上げていたものを一つの語形にまとめた（Azorín, 2000: 67）ことなどからネブリハの辞書より見出し語数は少ないようである。語頭 *agua* の語は、17語である。配列は *c /k/* の後ろに *ç, c^e, ch*、現代語で */x/*

の音価に相当する j の後ろに i /i/, y /j/ が、l の後ろに ll が、v /u/ の後ろに v /b/ が続く。文法情報の記載はない¹⁴⁾。

(5) 日本語

史上最初の日西二言語辞書は、フィリピンのマニラで印刷された『最初ポルトガル語で表された日本語彙集（日西辞典）』（*Vocabulario De Iapan declarado primero en portvgves por los Padres de la Compañia de Iesus de aquel reyno, y agora en castellano en el Colegio de Santo Thomas de Manila*, 1630）¹⁵⁾である。題名に示されているように、日本語史研究の貴重な資料である『日葡辞書』（*Vocabulario Da Lingoa de Iapam*, Nagasaqui, 1603–1605）のポルトガル語の部分を変えてスペイン語にした辞典である。見出しとしてあげてある日本語の語義をスペイン語で説明している本格的な辞書である¹⁶⁾。

逆の日本語を探し出す辞書としては、イタリアのローマで印刷されたディエゴ・コリヤード『日本語簡約辞典（羅西日辞典）』（*Diego Collado, Dictionarivm sive Thesauri Linguae Iaponicae Compendivm*, Roma, 1632）が最初である。“Aqua, ae. Agua, mizzu.”のようにラテン語が見出し語で、それに相当するスペイン語および日本語が書いてある。“Aquam calefacio, calentar agua. Yu vo vacaxi,u.”のような項目もある。同じ形式のラテン語ポルトガル語日本語辞典である『羅葡日辞典』（*Dictionarivm Latino-Lvsitanicvm ac Iaponicvm ex Ambrosii Calepini volumine depromptum*, Amacusa, 1595）がやはり先に印刷されている。ポルトガル語との辞書は日本国内の長崎と天草で印刷されたが、スペイン語との辞書はマニラとローマである。1613年のキリスト教の禁止、1624年のスペイン船の来航禁止、1639年のポルトガル船の来航禁止といった幕府の鎖国政策が影響している。

7. スペイン王立学士院

(1) スペイン王立学士院の設立

ビリェーナ侯爵ファン・マヌエル・フェルナンデス・パチェーコ（Juan Manuel Fernández Pacheco, marqués de Villena）の尽力で1714年にスペイン語スペイン王立学士院が、スペイン語を「浄化し、固定し、輝きを与える」（*Limpia, fija y da esplendor*）目的で設立された。学士院（Academia）とは、イタリアのクルスカ学会（*Academia della Cruzca* 1583年設立、1612年に辞

典)、フランスのアカデミー・フランセーズ (Académie française 1635年設立、1694年に辞典) の設立や活動を支えている思想の流れを受けるもので、優れた文体や語彙の規範を示し、俗語や外来語、新語の普及を防ぎ、言語と文化を高めようとする考えだ。スペイン語についても規範を示し近代的な言語としての発展を目指すために設立され、国王の庇護を得て王立の名が付けられた。この学士院の最初の事業が、『権威の辞典／カスティーリャ語辞典』(Real Academia Española, *Diccionario de Autoridades / Diccionario de la lengua castellana, en que se explica el verdadero sentido de las voces, su naturaleza y calidad, con las frases o modos de hablar, los proverbios o refranes, y otras cosas convenientes al uso de la lengua*, 1726–1739) の編集と出版である。権威の辞典というのは通称で、スペイン語の権威と認められた文学作品などからの例文が多数引用されているからである。扉にはタイトルとして『カスティーリャ語辞典、語の真の意味とその性格と質を説明し、言語使用に適切な熟語、話し方、ことわざなどを含めて説明している』と書かれていて、全部で6巻からなる。見出し語には名詞(とその性)、動詞(他動詞、自動詞、再帰動詞)、形容詞、副詞、分詞(現在、過去)など品詞の文法情報が略号で示されている。語源のラテン語形も掲げ、動詞の不規則活用も語義の後ろに説明されている¹⁷⁾。派生語 (aguaardiente)、熟語 (agua bendita)、慣用句 (agua va) やことわざ (Al enfermo que es de vida el agua le es medicina.) も、主要な語の見出し語の次に一段小さい活字の大きさの見出しで掲げられている。

辞典の他にも学士院は、1741年にスペイン語の綴り字法の規範を定めた『正書法』(Ortografía)、1771年に文法書の第1版、『カスティーリャ語文法』(Gramática de la lengua castellana) を出版している。他にも古典の校訂版(1780年に『ドン・キホーテ』*El Quijote* (1605, 1615)、1815年に『七部法典』*Fuero Juzgo* (13世紀) など) を出版している。

(2) スペイン王立学士院の辞書

辞書の方は、1780年に、『権威の辞典』の例文を削除して簡略化した『使用しやすいように1巻本にしたカスティーリャ語辞典』(*Diccionario de la lengua castellana reducido a un tomo para su más fácil uso*, Madrid, 1780) を出版し、これが後年学士院(アカデミア)の辞書とされる全ての版の元となった。1783, 1791, 1803, 1817, 1822, 1832, 1837, 1843, 1852, 1869, 1884, 1899,

1914, 1925, 1936, 1947, 1956, 1970, 1984, 1992, 2001年と版を重ねている。1803年の第4版から1992年の第21版までは、chとllを一文字として配列している。1925年の第15版からタイトルが『カスティーリヤ語辞典』から『スペイン語 (español) 辞典』となった¹⁸⁾。また1992年の第21版から、CD-ROM版、点字版も作成、販売された。現時点で印刷本として最新版なのは、2001年に出版された第22版で、88,000以上の見出し語数を掲載している。

スペイン語辞書の発展や変化は、学士院の辞典を無視して語ることができない。スペイン語の辞書や単語について語る場合は、良くも悪くもだれもが学士院の辞書を引き合いに出す。スペイン語と他の言語との二言語辞書作成時にも学士院の辞典が参考にされる。

毎回新しい版が出版されるとすぐ次の版の出版準備が行われ、現在でも改訂作業が続けられている。また現在では出版された印刷本から部分的に改訂された版の本文がインターネット上のスペイン王立学士院のウェブ・サイト (<http://www.rae.es/>) で検索、閲覧が可能となっている。

(3) スペイン語学士院連合

スペイン語圏諸国は、スペイン語スペイン王立学士院との連携を持つスペイン語の学士院を持っている。以下それぞれの設立年と国名を並べる。

1871コロンビア、1874エクアドル、1875メキシコ、1876エルサルバドル、1883ベネズエラ、1885チリ、1887ペルー、1887グアテマラ、1923コスタリカ、1924フィリピン、1926パナマ、1926キューバ、1927パラグアイ、1927ドミニカ、1927ボリビア、1928ニカラグア、1931アルゼンチン、1943ウルグアイ、1949ホンジュラス、1955プエルトリコ、1973北アメリカ (アメリカ合衆国) とスペインを合わせて22の学士院がある。これらの学士院は、それぞれの国の言語政策に関与すると同時に、スペイン語圏全体をスペイン語共同体として基礎的統一を維持し保証するための活動を行っている。1951年にメキシコ大統領ミゲル・アレマン (Miguel Alemán) の提唱により、それまでに設立されていた各国学士院の代表がメキシコ市に集まって会合を行い、スペイン語学士院連合 (la Asociación de Academias de la Lengua Española) を設立した。この連合が4年ごとになぜかかの都市で総会を開催し、スペイン語についてスペイン語圏全体に影響を持つことを話し合い、決めてきている。1994年の総会では、アルファ

ベット順配列の変更が決定されている。それまでの辞書は、chとllを一つの文字として扱いそれぞれcの次とlの次に配列していたが、それをcとh、lが二つ並んでいるのと同じ扱いへと変更された。現在日本で発刊される辞典も、この変更決定に従った新しい配列となっている。

1999年にスペイン王立学士院が出版した『スペイン語正書法』には、表紙に各国スペイン語学士院校閲 (Edición revisada por las Academias de la Lengua Española) と表記してある。スペイン王立学士院の伝統的な事業は、辞書、正書法そして文法という、言語使用や統一を保つのに基本的な三つの規範を作成し、普及し、改訂していくことである。歴史的には、これは、スペイン、それも一部の話し手(カスティーリャ地方北部)をモデルとして、外来語の侵入や内部的な言語変化を防ぎ、スペイン語を純粋に保とうとすることを目指していた。現代の学士院の考え方はそれとは異なり、スペインと中南米全体の中で、内部的な地域差や発展を認めつつ一つの言語共同体、すなわちスペイン語共同体としての基礎的統一を維持し保証することを、スペイン王立学士院のみならず、他のスペイン語圏諸国の学士院との共通の課題としている。

現在、スペイン王立学士院は、スペイン語辞典の改訂版を各国スペイン語学士院と共同して編纂作業にあたっている。インターネットを利用して、スペイン王立学士院の会合で認められた内容を各国学士院に送り、意見を付けて送り返されたものを検討し、内容に反映させているとのことである。

8. 日本語とスペイン語との辞書

日本語とスペイン語との二言語辞書は、当然ながら日本語学習とスペイン語学習の二つの利用目的があり各々の目的に即した編集がされている。スペイン語話者による日本語学習は、フランシスコ・ザビエル来日に始まるキリスト教宣教から始まった。日本におけるスペイン語学習は、移民と貿易を中心とするフィリピンと中南米との関係から始まった。組織的なスペイン語教育・学習は1897(明治30)年の高等商業学校附属外国語学校開設に際し西班牙語科が設置されてからである。

(1) 日本語学習のための辞書

17世紀前半の辞書については、先に見てきた。これらより2世紀半以

上後の1897(明治30)年に *Vocabulario japonés* (日本語語彙) のタイトルで、奥付に『スパニシエ会話』とあるスペイン語と日本語との辞書 Ynigo (1897)¹⁹⁾がある。日本語の発音とローマ字綴の説明の後、1ページから13ページまで数表現、食べ物など意味別語彙、14ページから97ページまで西和辞書(日本語もローマ字表記)、98ページから139ページがローマ字表記アルファベット順配列の和西辞書である。その後、また1ページからページ付けがあり、71ページまで40課からなる文字や敬語学習を含む日本語学習書となっている。その後ろにまた1ページから3ページまで、スペイン語、漢字カナ混じり日本語、ローマ字表記日本語による語彙集78語の掲載がある。辞書の部分は、1段組で文法情報はなく、西和が2,000語ほど、ce, ci の配列は現代の西和辞典と同じで、ch で始まる2語がcl で始まる語の中に入りこんでいるのは誤植であろう。Li は1の最後に配列してある。日西が1,000語ほどである。西和の *agua* で始まる見出し語は、*agua* と形容詞付の名詞句で5あるが、間に、

ESTA YA EL AGUA CALIENTE? — *Oyuga waitaka?*

TRAIGA UN POCO DE AGUA — *Midzu wo motte kite okure*

ESTA DEMASIADO CALIENTE — *Kono yu amari atsui desu*

という3つの項目が同じ形式で並んでいて、語彙の一覧のみでなくわずかではあるが例文が記載されているとみなせる。文法情報はない。

前書きにこの語彙集は“tomado de diferentes diccionarios de bolsillo, de los muchos publicados en Japon(sic) en distintos idiomas” (種々の言語による日本で出版された、様々な小辞典から取った) とある。元となった別の言語の語彙集に見出し語の選定がどれほど依存しているかを精査する必要があり、また収録語数の制限によるものとも考えられるが、キリスト教宣教に必要と思われる語彙は乏しい。MINISTRO DE ESPAÑA: *Hispania no Koshi*, LEGACION DE ESPAÑA: *Hispania Koshi-kan* (62) の掲載があり、商業取引に必要と思われる語彙がかなり収録されていることから²⁰⁾、商取引のために日本語を学ぶ目的の書と考えられ、著者はスペイン人²¹⁾で商業取引従事者あるいは外交官と推測される。

聖ドミニコ会のホアン・カルボ師が27年間日本に在住し布教にたずさわりつつ執筆した『日西大辞典』が1937(昭和12)年に日本国外務省と(勸比津賓協会(日本フィリピン協会)の援助により三省堂から出版された(カルボ, 1937: 序, 自序)。日本語の発音と動詞活用の解説が冒頭にあり、

辞書部分は、見出し語がローマ字綴アルファベット順配列、漢字カナ混じり表記が添えられ、品詞略語の後にスペイン語訳とローマ字表記の例文とそのスペイン語訳、語によっては専門分野が略語で示されている。辞書の部分は、2段組みで1,427ページある²²⁾。

「日本人ペルー移住80周年を記念」の語句が含まれた献辞と在ペルー日本大使の1979年6月付挨拶文が巻頭に掲げられスペインで出版された Martínez & Kato の *Diccionario español japonés* (Madrid, 1982) と在日本スペイン大使挨拶掲載の聖ドミニコ会ピセンテ・ゴンザレス師と一色忠良共編の『西和辞典』(エンデルレ書店, 1986) の二つの辞典は、日本語学習者に便利のように語義と例文の日本語がローマ字表記(後者は漢字カナ混じりとの併記)されている。

(2) スペイン語学習のための辞書

Ynigo (1897) の翌年出版の片桐 (1898) もタイトルは『日本西語学会話編』であるが、総ページ177ページ全体の3分の2ほどは、和西語彙集である。1ページから44ページまでは、意味分野別の語彙集で1段組のページに18行で漢字カナ混じりの見出しにスペイン語(カタカナの発音表記)があり語数およそ700語、その後に会話編。また106ページから最後177ページまで、1ページ16行の2段に、カタカナ表記の見出し語に漢字カナ混じり表記が付されイロハ順に配列してあり、語数は1,000語ほど、相当するスペイン語とそのカタカナ表記による発音が示してある。

大正になってから「辞典」のタイトルのものが出されている。大正5年の酒井市郎²³⁾『新訳西和辞典』(海外社, 1916) である。児玉 (1999: 101)、中川&児玉 (2000: 130) によるとこの辞典は、小型本で、約6,500語を収録していて、「むしろ単語集と言うべき」とされている。

本格的な西和辞典は、昭和になってからの村岡玄『西和辞典』(東京西語学会, 1927) であろう。初版のアルファベット順の配列の後ろに、またaから始まるアルファベット順に配列された増補部分を合冊した増補版を浅香 (2006: 105) によると計5回出した。「新增補第一版」(1956) と奥付にある版では、最初の部分が“a”の見出しで始まり、第一増補 (1929) が“ababán”から、第二 (1937) が“abacisco”から、第三 (1954) が“abadiense”、第四の第一輯「術語・新語・中南米語」が“abalanado”、第二輯「隠語・俗語」が“abanico”、第三輯「秘語・通語」が“abajiné”でそれぞれ始まっ

ていてページ番号もそれぞれ1から始まっている6つの部分が本篇の後ろに付けてある。増補部分を別に配列しているのは検索には不便である。Aguaの4文字で始まる見出しは、本篇に90、第一増補に38、第二が3、第三が1、第四の一が15、二が2、三も2ある。本篇と第一増補では同じaguaの見出し語を掲げ、熟語を増補している例がある。固有名詞も見出しに掲げられていて、浅香(2006: 105)によると最後の増補(1957)を含め見出し語数は、計十数万語である。品詞、使用地域、文体、専門分野も略号で示され、一つの見出し語に複数の語義あるものは数字で分けて示されている。動詞の活用形の表示はない。

筆者がスペイン語を勉強し始めたとき、本格的な西和辞書は、一種類しかなかった。それが高橋正武『西和辞典』(白水社, 1958)である。見出し語数は、「ほぼ68,370」とまえがきにある。「ほぼ」と言いながら、十の位までの数をあげているところに著者の厳密さを求める態度が見て取れるように思われる。例文が少ない、新語があまり載っていない、上品でない語が載っていない、イラストがないなど不満はあったが、1990年に別の種類の辞書が出版されるまで、その当時の最良、最大の西和辞書として、スペイン語を本格的に学び始めた者すべてと言っていいくらいの者がこの辞書のお世話になっている。一人の編者による辞書で、まえがきに、何度も、それも校了ぎりぎりまで手を入れた著者の姿勢が示されている。1978年に増訂版²⁴⁾が出て、そのまえがきには、「版を重ねるたびごとに、補正を加えてきた」とある。配列でch, llがそれぞれcとlとは別になっているのは当時のスペイン語辞典に倣ったものである。品詞等を略語で示し、不規則動詞活用は番号が付され、巻末の活用表を見ることで活用形を見ることができる。

和西の部を付けた永田寛定監・渡辺通訓『スペイン語小辞典』(大学書林, 1961)、すべてのページにイラストを入れ、かなりの例文を載せた瓜谷良平監『絵入スペイン語辞典』(大学書林, 1969)、基本5,000語すべてに発音記号と例文を載せた高橋正武他『スペイン基本語辞典』(白水社, 1972)などを経て²⁵⁾、1990年に収録語数の多さを誇る本格的な桑名一博他『西和中辞典』(小学館)と学習用に訳語と例文を厳選した宮城昇他『現代スペイン語辞典』(白水社)が発刊された。これらはどちらも多数の著者による共同作業の成果で、見出し語中での重要語を示し、発音表記を付け、

文法情報、使用地域・文体、同義語・反意語、例文やイラストを載せている。さらに前者は分綴点を示し、一部の語に語源を記述している。後者には見出し語相当の英語の記載もある。直後に、独自の例文を掲載した Carlos Rubio & 上田博人『新スペイン語辞典』(研究社, 1992)が出た。それぞれの改訂版²⁶⁾と原誠『クラウン西和辞典』(三省堂, 2006)が現時点(2010年10月)での学習および実務用の本格的西和辞典である。

スペイン語学習者のための日本語からスペイン語を引く第2次世界大戦後最初の辞書は、1962(昭和37)年の永田寛定監・田井佳太郎『和西小辞典』で、その後同じ永田寛定監修で『和西大辞典』(1963)、『和西中辞典』(1968)が大学書林から出版された。見出しが訓令式ローマ字表記でアルファベット順配列、その日本語見出し語の品詞、外来語の語源、専門分野が示されている。

1979年に、ひらがな表記の見出し語で五十音順の宮城昇他『和西辞典』(白水社)と瓜谷良平監・宮本博司『現代和西辞典』(大学書林)が出た。両方ともスペイン語訳語の文法情報が記載され、例文と収録語数の多い前者は、2004年に Carlos Rubio 他『クラウン和西辞典』(三省堂)が出版されるまで、和西辞典としてほぼ独占的な地位を占めていた。『クラウン和西』には新語が加わっている他に、地域によるバリエーションがいくつかの項目に含まれているという点で、他の外国語辞書とも違った特徴を持っている。

9. 辞書の未来

スペイン王立学士院の辞書の最新版はインターネットで閲覧可能である。またスペイン語用例のデータベースとして、「現代スペイン語参照コーパス」El Corpus de referencia del español actual (CREA)、「スペイン語歴史コーパス」El Corpus diacrónico del español (CORDE)が参照可能である。スペイン語圏の国別、書籍、雑誌、新聞、口語の文字化、その他の媒介別、専門分野別に語形を検索して、前後の文脈を表示したり、統計数字を得たりすることができる。また、「新スペイン語辞書宝典」El Nuevo tesoro lexicográfico de la lengua española (NTLLE)は、ネブリハの辞書からアカデミアの今まで出版された辞書を含む66の辞書を見出し語で年代別に参照できるDVDであり、アカデミア出版の29の辞書は、インターネット上の

アカデミアのサイトで参照することができる。他にも各種の西辞書、英語、フランス語、ドイツ語などとスペイン語との辞書がインターネットで閲覧可能となっている。

辞書でなくても、検索サイトでも世界中のウェブページにある語や語句の検索が可能で、検索結果から用例を調べられる場合がある。イメージをキーワードで検索する機能を使えば、その語が示す写真や絵を表示することも可能であるから、西絵辞書としての利用もできる。語によっては、ことばの説明だけではよくわからなくても写真を見るとどのような形のものかわかる。

コンピュータ関連のハードウェアやソフトウェアは超高速で進化している。ただしそこに載せる内容、コンテンツと言われるものは、今まで営々と手書きや印刷物で長い歴史と伝統によって蓄積されたものが基礎になっている。スペイン語の辞書にしても、コンピュータやインターネットの発展で、時間と空間の制限なしにスペイン王立学士院の辞書の最新版を閲覧することができるが、その内容は、いくつもの版を改訂し続けたスペイン語学者・スペイン語文学者の努力の上に築かれたものだ。

電子辞書でスペイン語と日本語との辞書があり、見出し語のみならず、成句や例文を検索することができ、また閲覧している説明の中にある語の説明へジャンプする機能など、従来の紙の辞書ではできない検索方法ができる。しかし、その内容は、現在までのところ紙に印刷された辞書がもとになっている。

従来の紙の辞書ではできない検索方法によって、自宅でも会社でも学校でも、また昼でも真夜中でも膨大なデータの中から、特定の希望する情報を得るということが、情報システムの発展によってますます容易になっていくことと思われる。しかしまた同時に、江戸時代中期の日本で杉田玄白や前野良沢らが知恵をふりしぼってオランダ語を解読していった努力、10世紀中頃から11世紀のスペイン、カスティーリャ地方の石造りの修道院の中で修道士達がラテン語の文書を読み進めようとした仕事は、人間の文化継承や外国文化理解のために決して絶やすことのできない営みであろう。理系の学問も人間の生活のために不可欠であるが、語学や文学の研究もまた、人類の未来にとって必要不可欠な学問分野なのである。

注

- 1) 「辞書」と「辞典」は、ほとんど区別なく使われている語である。本稿では、書物として「辞典」を見出し語に語義説明や他言語への訳語を付けて、検索できるよう配列したものを「辞書」や「語彙集」の名称で示す。これらを区別できない場合もある。本稿の一部には、平成17年度愛知県立大学公開講座「辞書——ことばの万華鏡：スペイン語」で発表した内容を含む。
- 2) “El lenguaje que ambas Glosas emplean ... sólo se asemeja más al de los más romanceados del siglo XI que hallamos en Aragón.” (Menéndez Pidal, 1972: 382), “Unas y otras datan del siglo X o comienzos del XI, y están en dialecto navarro-aragonés.” (Lapesa 1980: §41.1) 「どちらの注解も10世紀か11世紀初頭のものであり、ナバラ・アラゴン方言で書かれている。」(ラペサ, 2004: 156)
- 3) 『古文書46番』について García & García (1997a) (1997b) による。
- 4) 4あるいは5文字以降の順番は厳密なアルファベット順になっていないようである (<http://www.vallenajerilla.com/glosas/pactiones.htm> (2010年8月2日参照)にあるpで始まるページ)。マッカーサー (1991: 113) によると西欧の辞書の配列には、テーマ別の伝統とアルファベット順の伝統との二つがあり、古くはテーマ別が優勢だったが、アルファベット順が徐々に定着していき、書物が写本の時代から印刷の時代になった1600年頃に本格的に広く使われるようになったとある。「古文書46」は、アルファベット順が普及する600年以上前にこの配列法を採用していたことになる。
- 5) Claudia García Turza & Javier García Turza Códice 46: En los orígenes de la lengua y la cultura española (Noticias de la Universidad de La Rioja) (http://www.vallenajerilla.com/glosas/codice_46.htm 2010年7月12日参照)
- 6) “diccionario. (Del b. lat. dictionarium). 1. m. Libro en el que se recogen y explican de forma ordenada voces de una o más lenguas, de una ciencia o de una materia determinada. 2. m. Catálogo numeroso de noticias importantes de un mismo género, ordenado alfabéticamente. (DRAE)” (辞書：1. ある専門分野や特定の分野について、一つかそれ以上の言語の語を集め、順番に並べて説明している本。2. ある種類の情報を多数集め、アルファベット順に並べた一覧表)
- 7) 文献の行間に書き込まれた注釈が辞書の前身であるという考えは、Claude Buridant (1986) “Lexicographie et glossographie médiévales. Esquisse de bilan et perspectives de recherche”, *Lexique*, 4, pp. 9-46 (Azorín (2000: 16) の引用による) の語彙学の発展的分類にも見られる。グリーン (1999) は、イギリスでの辞書作りの始まりとして写本の注釈に言及している。
- 8) 『注解』の書き込みに際し、現存していない語彙集が参照された可能性について指摘されている。(Manuel C. Díaz y Díaz (1978) *Las primeras glosas*

- hispánicas*, Universidad Autónoma de Barcelona, Barcelona. Lapasa (1980: 164, n.6) および Alvar Ezquerria (2002: 53) の引用による)
- 9) “tanto P (王宮語彙集) como T (トレード語彙集) son de fines del siglo XIV o de comienzos del XV.” Castro (1991: xxii), エル・エスコリアル語彙集: “letra del siglo XV” (1991: xxii).
 - 10) 見出し語数は、Castro (1991) の翻刻に付された番号による。
 - 11) 現代のアルファベットの i, j の順でなく j, i の配列となっている。
 - 12) 堀田 (1966: 10, 11) で、Alcalá のアラビア語、Molina のナワトル語、Percyvall の英語との辞書の序文でのネブリハへの言及等、影響を指摘した。
 - 13) アラビア語部分は省略した。
 - 14) ここで見てきた辞書と同じ15世紀後半のフランス語などとの対訳辞書について見ていく必要があるが、今後の課題としたい。
 - 15) 『1630年マニラ版日西辞典』(天理図書館本複製第54号雄松堂書店1978)
 - 16) 水(みず)を「*Mizzu Agua*」としてあげている。*Mizzu* の綴り字で始まる見出し語は、*Mizzu*, *Mizzubixacu*, *Mizzubo* など52が掲載されている。
 - 17) 略号で品詞を示す方法は、現代の辞書に受け継がれている。この工夫が『権威の辞典』編纂のために参照されたイタリア語やフランス語の辞典 (prólogo: III) から受け継いだものかは、今後の課題としたい。
 - 18) 1925年版からのカスティーリャ語からスペイン語へと言語の名称変更には、1923年から30年まで続いたプリモ・デ・リベラ (Miguel Primo de Rivera y Orbaneja, 1870–1930) の独裁制という政治体制が何らかの役割を果たしているかもしれない。名称変更と共に、この版から、イベリア半島の諸方言とアメリカ州スペイン語の語形の収録が著しく増加したとのことである (Azorin, 2000: 282)。
 - 19) 寺崎 (1999: 702)、浅香 (1999: 168) には *Yñigo* とある。筆者が参照した国立国会図書館近代デジタルライブラリー掲載の版では表紙に *Ynigo* の表記である。「日本で刊行された最初のスペイン語入門書」(寺崎, 1999: 702)ではなく日本語の入門書である。浅香 (1999: 169) によると Ediciones Hiperión による復刻版がある。
 - 20) ADUANA: *Zeikan* (15), AJUSTE, CONTRATO: *Keiyaku, yakujo* (16), ALQUILAR (una casa): *Karu, kairu*, ALQUILAR (un criado): *Yatou* (17), CAJERO: *Kuaikei* (24), CAPITAL (dinero): *Shihon, motode* (26) など。
 - 21) PATATA: *Jagaimo* (11), PATATA DULCE: *Satsumaimo* (11), TORTILLA: *Tamago yaki* (12) などの収録語も著者の出身地推定の手がかりとなるかもしれない。
 - 22) 参照したのは第7版 (1960) である。
 - 23) 国立国会図書館蔵書目録では「酒井祥州編」とある (<http://opac.ndl.go.jp/> 2010年3月11日参照)。同じ著者名の酒井祥州著『獨習西班牙語講義: 全』(海

- 外社, 1918) の奥付著者名に酒井市郎とあるとのことで、同一人物と考えられる。(Webcat Plus, <http://webcatplus.nii.ac.jp/> 2010年3月11日参照)
- 24) 児玉 (1999: 104)、中川&児玉 (2000: 137) に「ざっと見たところ増補された形跡はない」とあるが、agua の4文字で始まる見出し語を見た限りでも1958年版は89、1979年増補版は、aguacatero, aguaraparse の二つの見出し語が増えて91ある。他に ordenador 「電子計算機」、Comunidad Económica Europea 「ヨーロッパ経済共同体」、gota 「3 pl. 点滴薬」といった語義が増えている。
- 25) 一般辞書を補う特定領域の辞典・語彙集もいくつか出版されている：慣用句・熟語 (1929, 1968, 2006)、地名 (1942)、意味別分類 (1969, 1989, 1974)、中世スペイン語 (1980)、ことわざ (1985, 1990, 2003, 2004)、ジェスチャー (1998)、語源 (1998, 1999)、スペイン語学 (2007) など。また実用専門分野でも日西両言語間での訳語を掲げた辞典・語彙集が出されている：医学 (1944, 1994, 2003)、貿易商品名 (1950, 1961)、商業 (1958)、鉄道 (5か国語版に日本語追加、1967)、経済 (1976)、土木 (1983, 2002)、技術 (1990)、漁業 (1991)、建築土木 (1993)、法律 (1993, 2004, 2006)、情報通信 (1996)、ビジネス (1999)、海事 (2000)。(坂東 (2005) からの情報も含む)
- 26) 宮城昇他『現代スペイン語辞典改訂版』(白水社, 1999)、上田博人& Carlos Rubio『プエルタ新スペイン語辞典』(研究社, 2006)、高垣敏博監『西和中辞典第2版』(小学館, 2007)。

引用文献

- (本文中で書誌事項を記載した辞書は、再掲を省略したものがある。)
- 浅香武和 (1999) 「日本人とスペイン語の出会い」『スペイン語の世界』京都、世界思想社、156-171
- 浅香武和 (2006) 「孤高のスペイン語辞書編纂者——村岡玄」川成洋&坂東省次編『スペインと日本人』丸善、102-110
- 片桐安吉 (1898) 『日本西班牙会話編』神戸、熊谷久栄堂 (明治31年) (<http://kindai.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/861709/>)
- カルボ、ホアン (1937) 『日西大辞典』三省堂
- グリーン、ジョナサン (1999) 『辞書の世界史』、三川基好訳、朝日新聞社
- 児玉悦子 (1999) 「研究ノート：西和辞典の過去と現在」国士舘大学教養論集 47, 99-105
- 寺崎英樹 (1999) 「スペイン語」『独立百周年 (建学百二十六年) 記念東京外国語大学史』、681-735
- 寺崎英樹 (2002) 「日本のスペイン語辞書の歴史」、Castalia : 東京外国語大学

- 附属図書館報 第4号：インターネット版、2002年9月30日発行所収 (<http://www.tufs.ac.jp/common/library/gaiyo/kanpo/castalia-4.pdf> 2005年11月6日参照)
- 中川清&児玉悦子(2000)「研究ノート：西和辞典の周辺」敬愛大学国際研究6, 127-152
- 堀田英夫(1996)「ネプリハの『羅西辞典』とコリヤードの『羅西日辞典』」ロマンス語研究29, 10-19
- 坂東省次(2005)『スペイン関係文献目録』大津市、行路社
- マッカーサー、トム(1991)『辞書の世界史——粘土板からコンピューターまで』、光延明洋訳、三省堂
- ラベサ、ラファエル(2004)『スペイン語の歴史』山田善郎監修、中岡省治・三好準之助訳、昭和堂
- Alcalá, Pedro de (1505) *Vocabulista árabigo en letra castellana*, Granada. (<http://www.cervantesvirtual.com/servlet/SirveObras/68026286006683384100080/index.htm> 2010年9月27日参照)
- Asociación de Academias de la lengua española (2004) *La nueva política lingüística panhispánica*, Real Academia Española, Madrid.
- Alvar Ezquerro, Manuel (2002) *De antiguos y nuevos diccionarios del español*, Arco/Libros, S. L., Madrid.
- Azorín Fernández, Dolores (2000) *Los diccionarios del español en su perspectiva histórica*, Publicaciones de la Universidad de Alicante, Alicante.
- Bajo Pérez, Elena (2000) *Los diccionarios – Introducción a la lexicografía del español*, Ediciones Trea, S. L., Gijón (Asturias)
- Castro, Américo (1991) *Glosario latino-español de la edad media*, (復刻) CSIC, Madrid. (RFE, Anejo 22. Madrid: Centro de Estudios Históricos, 1936)
- Colón, Germán y Soberanas, Amadeu-J (1979) “Estudio preliminar” en *Elio Antonio de Nebrija: Diccionario latino-español (Salamanca 1492)*, Puvill-Editor, Barcelona.
- García Turza, C. & García Turza, J. (1997a) “Siglo X: balbuceos de la lengua castellana (El manuscrito 46 de la Real Academia de la historia: aspectos históricos y filológicos)”, *Insula*, 607, 1-7.
- García Turza, C. & García Turza, J. (ed.) (1997b) *Fuentes españolas altomedievales: El códice emilianense 46 de la Real Academia de la Historia, primer diccionario enciclopédico de la Península Ibérica*. Real Academia de la Historia y Fundación Caja Rioja, Logroño. (<http://www.vallenajerilla.com/berceo/aspectoshistoricos.htm>) (<http://www.vallenajerilla.com/glosas/codice46.htm> 2010年8月2日参照)
- Lapesa, Rafael (1980) *Historia de la lengua española*, 8ª ed., Editorial Gredos, Madrid.
- Las Casas, Cristóbal de (1570) *Vocabulario de las dos lenguas Toscana y castellana*, Sevilla (Edición de A. David Kossoff, preparada por Ediciones Istimo, S. A., para

- Wareham Imprints, Wareham, Massachusetts. Madrid, 1988)
- León-Portilla, Miguel (1970) “Estudio preliminar” en Molina (1957) edición facsimile, Editorial Porrúa, México.
- Martínez Dueñas, Luis S. & Kato, Yda, Manuel M.(1982) *Diccionario español japonés*, EdI-6,S.A., Madrid.
- Menéndez Pidal, Ramón (1972) *Orígenes del español*, 7ª ed. (Según la tercera, muy corregida y adicionada, 1926, 1950) Espasa-Calpe, S.A. (Obras completas de R. Menéndez Pidal, VIII)
- Molina, Alonso de (1571) *Vocabulario en lengua castellana y mexicana y mexicana y castellana*, edición facsimile, Editorial Porrúa, México, 1970.
- Nebrija, Elio Antonio de (1492) *Gramática de la lengua castellana*, Edición preparada por Antonio Quilis, Editora Nacional, Madrid, 1980.
- Nebrija, Elio Antonio de (1492) *Diccionario latino-español (Salamanca 1492)*, por Germán Colón y Amadeu-J Soberanas, Puvill-Editor, Barcelona, 1979.
- Nebrija, Elio Antonio de (¿1495?) *Vocabulario español-latino*, Facsímil de la primera edición, Real Academia Española, Madrid, 1989.
- Percyvall, Richard (1591) *BIBLIOTECA HISPANICA Containing a Grammar, with a Dictionarie in Spanish, English, and Latine*, London.
- Quilis, Antonio (1980) “Estudio” en Quilis, Antonio ed. *A. de Nebrija: Gramática de la lengua castellana*, Editora Nacional, Madrid, 1980.
- Ramos Remedios, Emiliana (2000) La lengua romance a través de los Cartularios de Valpuesta (804–1200), (Euskonews & Media 61. zbk (2001/1/7–14), <http://www.euskonews.com/0061zbk/gaia6101es.html> 2010年7月12日, (*Estudios mirandeses: Anuario de la Fundación Cultural “Profesor Cantera Burgos”*, ISSN 0212–1875, N° 20, 2000, Ejemplar dedicado a: Valpuesta 804–2000. Mil doscientos años de Historia), pags. 139–142.)
- Siméon, Rémi (1977) *Diccionario de la lengua nahuatl o Mexicana*, (1ª ed. francés, París 1885) traducción de J. Oliva de Coll, Siglo XXI editores, México.
- Ynigo. T. De N., C. (1897) *Vocabulario japonés* / 『スパニシエ会話』、東京、丸善 (<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/862429>)

Historia de los diccionarios de español —en torno a los bilingües con el japonés—

HOTTA Hideo

El diccionario es una herramienta indispensable para el aprendizaje de un idioma extranjero y para cualquier trabajo en el que necesite usar una segunda lengua. En este artículo queremos tener una vision panorámica del desarrollo de los diccionarios de español, especialmente los bilingües español-japonés y japonés-español.

La historia de los diccionarios de español comenzó con las glosas de la Edad Media y con el Códice Emilianense 46 de la Real Academia de la Historia, el primer diccionario enciclopédico de la Península Ibérica que se terminó de escribir el año 964, aunque no podemos considerarlo como un diccionario de español sino del latín altomedieval. Después de los diccionarios de Palencia, Nebrija, Pedro de Alcalá, Alonso de Molina, Cristóbal de las Casas, Richard Percyvall, etc. apareció el primer diccionario japonés-español en 1630 en Manila y el latín-español-japonés de Diego Collado en 1632 en Roma.

Estos diccionarios del siglo XVII se redactaron con miras al aprendizaje del japonés por parte de los hispanohablantes. El libro más antiguo de la época Meiji sobre el español que conserva la Biblioteca Nacional de la Dieta de Japón, *Vocabulario japonés* (1897) de Ynigo. T. De N., C. está asimismo pensado para el aprendizaje del japonés y contiene unas dos mil entradas de español-japonés y unas mil de japonés-español. El año siguiente, en 1898, se publicó *Conversación japonés-español* de KATAGIRI que contiene, aparte de las frases conversacionales, un vocabulario español-japonés de unas 700 palabras y otro japonés-español de unas mil. La primera obra titulada *Diccionario español-japonés* es la de SAKAI del año 1916, que contiene unas 6.500 entradas. El primer diccionario español-japonés digno de usar para el trabajo de los especialistas del idioma es el de MURAOKA de 1927. Cada entrada tiene información de la categoría gramatical y muchas tienen marcaciones diacríticas, diafásicas y diatópicas. Contiene unas 150.000 entradas contando con los seis suplementos agregados en los años posteriores hasta 1956 o 1957. Lo sigue el diccionario de TAKAHASHI (1958) en el que los lemas de verbos irregulares tienen un número con el cual se puede

encontrar el paradigma de su conjugación. Los diccionarios actuales bilingües español-japonés cuentan con más ejemplos, transcripción fonética e ilustraciones. Algunos también incluyen la silabación y la etimología de las palabras.

El desarrollo de la tecnología informática nos ha permitido la búsqueda más rápida o sofisticada a través de los diccionarios electrónicos o de internet. Pero el contenido de esos diccionarios es el fruto del trabajo de muchas generaciones de lexicógrafos en el mundo, lo que nos hace pensar que son necesarias no solo las ciencias de la información, sino también las ciencias humanísticas como la lexicografía.